

# 設楽発掘通信

No.28  
平成29年  
6月号

## 愛知県埋蔵文化財センターについて

前回の設楽発掘通信では、西地・東地遺跡の遺物整理作業が始まったことをお伝えしました。この作業は愛知県埋蔵文化財センターが行っています。

今回は、この愛知県埋蔵文化財センター（以下、愛知埋文）についてご紹介します。正式名称は「公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター」と申します。

愛知埋文では、主に愛知県教育委員会を通じて委託される愛知県内の発掘調査をはじめとした埋蔵文化財を扱う業務を行っており、本部は弥富市にあります。

この本部へ、県内全域で行った発掘調査で出土した遺物や遺構の記録を運び、遺物の復元、保存処理、分析、発掘調査報告書の作成を行います。調査や報告書の刊行に必要な事務手続きも行っています。

内部は研究や分析、収蔵のための設備が設置されています。土日祝日は閉館していますが、平日にはこれまでの発掘成果を展示した「資料管理閲覧室」の見学や、収蔵図書の閲覧（図書の貸し出しは行っていません）もご利用いただけます。

近年は、前号でもご紹介した弥富春まつりに連動した「春の埋蔵文化財展」、毎年夏ごろに実施する、収蔵庫や整理作業を見学できる「バックヤードツアー」など、内部を見学していただける機会も増えてきました。その他、弥富市以外で行う見学などのイベントでは、十一月〜十二月頃に名古屋市博物館で実施予定の「考古学セミナー」、設楽町役場議場で三月に実施させていただいている、皆様ご存知の成果報告会「新設楽発見伝」などがあります。

（愛知県埋蔵文化財センター 鈴木 恵介）



春の埋蔵文化財展の本部玄関部分の飾り付け



遺物整理作業中の様子（西地・東地遺跡の出土品）



資料管理閲覧室（過去の調査の出土品を展示）



設楽町の調査実施遺跡と愛知埋文の位置

# 大畑遺跡の発掘調査を開始しました

大畑遺跡の調査が始まりました。大畑遺跡は周囲から孤立した丘陵の頂上付近標高四四六・八mにあります。今回の調査範囲には写真右上のように、中央に南北方向の谷があり、東西には丘陵の頂上が盛り上がる地形で、谷は南側（写真の左側）に向かって下っています。西側（写真の奥側）の丘陵上には、南北に細長い平場があります。調査は、東側（写真の手前側）の斜面から谷に向かって進めていきます。最初に表土掘削や遺構検出から始めています。

表土掘削は、写真右下のように、大型の掘削機械を使って表土（腐植土や、耕作土など）を除去する作業です。土の色や質感などの違いを確認しながら、試掘調査の結果を参考に、掘りすぎないように、丁寧に作業を進めていきます。ときには、切り株どうしの隙間や、全体的に数センチの厚さで表土を削ったりするため、オペレーターは高い操作技術が求められます。

大畑遺跡の周辺は、杉や檜が植林されていたため、切り株が多く残っています。切り株の周りは、作業員さんがスコップや、のこぎりなどを使って、きれいにしていきます。その最中に、写真左上のような剥片（石器を作る際にけられた石）が見つかりました。

表土掘削が終わると、作業員さんたちが、土の表面を削って、遺物や、周辺の地面の色と異なる部分がないかどうか、目を凝らして探します。これが検出と呼ばれる作業です。色の異なる部分は、昔の人たちが土を掘った跡の可能性があり、遺構と呼びます。今回の調査では、写真左下の白い矢印の部分ように、黄色い遺構面の中に、黒っぽい色の範囲が見えてきます。

まだ調査が始まったばかりですので、次号では、興味深い遺構や、遺物が報告できるかもしれません。

（株式会社二友組 高木 祐志）

# マサノ沢遺跡の調査が始まります

いよいよ7月からマサノ沢遺跡の調査が始まります。そこで、マサノ沢遺跡の発見に関連する話題を紹介します。

小松地区にあるマサノ沢遺跡は、設楽根羽（県道10号）線沿い、境川左岸に位置する縄文時代を中心とする遺跡です。付近には、昨年度まで調査していた滝瀬遺跡をはじめ縄文時代の遺跡が川沿いの河岸段丘上に立地します。

遺跡の発見はふるく、大正年間（六年あるいは十二年）に、畑地を水田に開墾する際、多くの土器や石器が出土しました。山間部の貴重な平坦面を水田化するようになり、それまで地中に埋まっていた縄文時代の地層が姿をあらわしました。これら開墾などによって見つかった遺物を精力的に収集し、調査研究されたのが夏目一平さんでした。夏目さんは旧津具村にある鞍船遺跡（上津具）、椋平遺跡（東栄町本郷）など山間部の先史遺跡を「北三河の遺跡」として考古学の研究誌『考古学雑誌』で紹介されました。

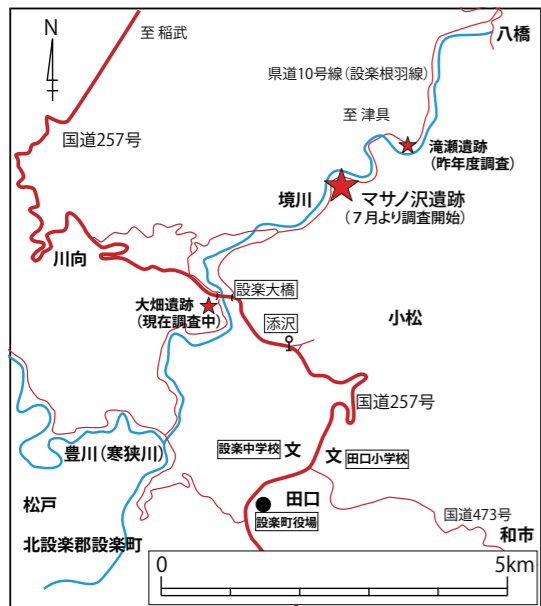
戦後の開墾（昭和二十三・二十四年）でふたたびマサノ沢遺跡から遺物が出



河岸段丘上に位置するマサノ沢遺跡



昨年度の範囲確認調査で検出された石囲炉



マサノ沢遺跡の位置

マサノ沢遺跡の位置  
（愛知県埋蔵文化財センター 永井 宏幸）

土すると、地元の郷土史家伊藤正松さんが収集し、岡崎の郷土誌『三河史談』にマサノ沢遺跡の発見顛末を詳細に報告されています。注目すべき内容は、二つあります。ひとつは、遺物を採集委託した青年から取材し「焼石・木炭・灰などの出たところもある」状況から、住居の存在を想定している点です。もうひとつは、「合口甕棺の発見で、條痕を全面にほどこした甕形土器が二個水平に横たわり、合せ口は互に交叉したあかも二重土器の如くなっていたが両端に二個の底部があつて合口甕棺であることが明らかとなった。そして甕棺の周囲には十貫匁位の石が数個めぐらせてあった。」と縄文時代晩期終末の土器棺墓を詳しく紹介している点です。住居の存在は昨年度の遺跡範囲確認調査で石囲炉（写真下）が見つかったことで追認され、これからの調査でも縄文時代後期の竪穴建物が発見されることが期待されます。また、「合口甕棺」は出土状態が詳細に報告され、現在の研究と比較検討を可能にしています。短い報告ではありますが、重要な指摘を後世に伝えていきます。

ところで、遺跡の発見はマサノ沢遺跡のように、土地の開墾によって地中の古い地層に眠っていた遺物が地上に偶然出てくることが多いようです。また、出土した遺物を正当に評価できる人の存在も重要です。北設楽郡には、日本考古学が産声をあげたところからすでに考古学の知識をもった研究者がいて、地域の人たちとつながりをもつて情報を交換しており、その様子は郷土誌や学会誌への寄稿に表されています。さあ、どんな新たな発見があるのでしょうか。今後も『設楽発掘通信』で紹介していきます。乞うご期待！



調査前の風景（中央谷部 南から撮影）



調査で見つかった剥片（長さは約5cm）



表土掘削の様子（東側斜面 南から撮影）



遺構の見え方

## 流域の狭間で

愛知県埋蔵文化財センターでは、設楽ダム建設工事に伴い、設楽町内の多くの地点にて、発掘調査を進めております。設楽町が所在する愛知県の東三河地域山間部では、地形によって水の流れが分かれ、三つの水系が隣り合っています。

水は平らに閉ざされれば溜まり、傾斜があれば高みから低みへと移ります。湧き出した地下水や降水は、流れとなって移動し、これらが集まって川となります。水の流れが海に注ぐまで、その集まりとなる範囲を「川流域」と呼びます。設楽地域を流れる水、稲武地域を流れる水、東栄地域を流れる水は、それぞれ豊川水系、矢作川水系、天竜川水系となり海に注ぎますが、陸で交わることはありません。

人が移動するための陸路は、時代が古くなるほど、水の流れを渡る地点が難所となります。水の流れの速さ、深さ、幅などが増すほど、渡ることが難しく



大畑遺跡付近の豊川水系境川



マサノ沢遺跡付近の豊川水系境川

なりますので、それぞれの水系では川に沿った道が自然に発生し、同じ水系の上流と下流の間では、人の移動、交流が活発となりました。これとは逆に別々の水系間では、人の移動、交流は、同じ水系での上下ほど活発ではなかったため、隣り合った地域であってもそれぞれの流域によって、人々の暮らし、習慣、言葉、などに違いが生まれました。これらの「違い」は、時代が古くなるほどその差が大きく、「地域の個性」となって、現在でも独自の生活文化として比べられます。

設楽ダム関連遺跡の発掘調査では、旧石器時代以降、近世、近代まで、人々の様々な暮らしを推定できる資料が検出されています。それらの資料は、土器の形ひとつとっても、流域の違いによる個性を見出すことができます。各水系の水はお互い交わりませんが、我々の祖先は難所を越えて様々な交わりをもとうとしたことでしょう。その交わりの濃淡が、現代の生活文化圏につながっているものと思われまます。私たちの暮らしは、どのような歴史的背景から成り立っているものなのか、こうしたことを解明するため、発掘調査の成果が少しでも役立つように調査を進めたいと思います。

(愛知県埋蔵文化財センター 松田 訓)

# 設楽発掘通信

No.28 平成29年6月号

編集・発行

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24

電話 (0567)67-4161【管理課】 4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>

Twitter [https://twitter.com/aichi\\_maibun](https://twitter.com/aichi_maibun)



印刷・協力

株式会社二友組